

令和 7 年 3 月

保護者・地域の皆様

関係各位

世田谷区立祖師谷小学校

校長 小俣 和也

前年度の改善方策について実行した改善結果

I 令和 5 年度の学校関係者評価アンケートより

【プラス評価の高かった項目について】※「とても思う」+「思う」%

—児童—

◇先生たちは、ていねいに指導してくれる。 93.1%

◇先生は、課題(めあて)について、自分で考えたり、友達と考えたりする時間を授業の中で取っている。 91.2%

◇先生は、映像やタブレットを工夫し、分かりやすい授業をしている。 90.6%

—保護者—

◇学校行事は、子どもにとって楽しい。 95.0%

◇学校行事は、子どもにとって達成感がある。 95.0%

◇本校は、学校公開や保護者会などで、児童の様子が分かる。 92.0%

—地域—

◇学校行事の内容は充実している。 100%

◇学校からのお知らせ（学校だより）などにより、学校の様子が分かる。 100%

◇学校の重点目標が明確である。 95%

【プラス評価の比較的低かった項目について】※「あまり思わない」+「思わない」%

—児童—

◇学び舎の中学校に行ったり、中学生が来たりする機会がある。 35.1%

◇先生たちに相談できる。 26.9%

—保護者—

◇「学び舎」の区立（幼稚園）中学校について情報が提供されている。 40.3%

◇私は、今年度の学校重点目標を理解している。 38.1%

—地域—

◇「学び舎」の活動について、情報が提供されている。 25.0%

◇通学している子どもたちは、交通ルールなどを守っている。 20.0%

児童は、学習 5 項目のうち 3 項目において 90% 以上の評価となった。他の 2 項目の「黒板の書き方やプリントなどを工夫している。」86.9%、「話し合ったり発表し合ったりする機会がある」89.4% も学習活動において中心となる活動なので、常に高い評価であるように授業改善を行っていく。また、ICT 等を活用した授業が行われることが増えた。児童が、調べる、まとめる、考えを共有する、動きを確認するなど様々な場面で活用してきた。

保護者、地域は、学校行事 3 項目において高い評価をいただいた。保護者においては、昨年度よりそれぞれ 9.2 ポイント、1.1 ポイント、7.8 ポイント高かった。今年度前半はコロナ禍で交流活動などが制限されたが、2 学期以降交流活動や体験活動を増やしてきた。本校の行事が、子どもにとって楽しいだけでなく、達成感が得られるよう引き続き行っていきたい。

学校公開は、3 学期は制限なしで参観していただいた。保護者会は状況を見てオンラインや対面など工夫して行った。児童の様子を見たり、情報交換したりする機会が増えたことで学校の様子を知っていただくことができた。

児童、保護者、地域ともに、学び舎の活動について低い評価だった。令和 5 年度はコロナ禍により他校との交流がかなり制限されたことが大きな要因といえる。しかし教職員が感染予防をした上で学び舎の授業参観や情報交換をしてきたことを保護者、地域へ伝えることが足りなかつたことも一因と考えられる。学校便りや学年便りで伝えていくようとする。

II 改善策を元に立てた令和 6 年度の重点目標と具現化の方策

1 課題意識をもって考え、自分の考えを表現できる子どもの育成

(1) キャリア・未来デザイン教育を推進する。

(1) キャリア・未来デザイン教育を推進する。

急速に変化する社会の中で、子ども一人一人が社会の担い手として自らが課題に向き合い判断して行動し、それが思い描く未来を実現できる人材を育成する。そのために「キャリア・パスポート」を作成し、自己を振り返ったり、新たな目標を設定させたりして、チャレンジする力を育てる。

(2) 課題を追究、解決する探究の過程を大切にする。

主体的な学びを推進するために、児童が学ぶことに興味や関心を持ち、課題を見いだし、解決の方法を考え、協働して学び、学習活動を振り返り次の学習につなげられるような探究の過程を大切にする。

(3) 教育 DX を推進する。

タブレット端末を活用した授業を推進する。リモート授業及びデジタル教材を使った課題解決学習や探究活動、ロイロノート等での考え方の交流、キュビナでの学習の深化、家庭学習での活用を推進する。また、「活用、自律・行動規範」となるデジタル・シティズンシップを身に付けさせる。

(4) 学校図書館と連携を図る。

図書館司書、PTA と連携し、各教科や総合的な学習の時間などで学習に必要な学校図書館や各教室の文献、資料を充実させる。

(5) 教員の各教科等の専門性を高める。

高学年一部教科担任制や交換授業を取り入れ、教員の教材研究の時間を確保し、児童に教科等の特性に触れる楽しさを味わわせる。また、低・中学年においても交換授業を取り入れる。さらに、ショート研修の時間を確保し、各教科等の指導方法を研修する機会とする。

(6) 本物に触れる授業を取り入れる。

地域人材等のゲストティーチャーを積極的に招き、話を聞いたり、体験活動を行ったりする。また、実物を調達したり、見に行ったりする直接体験を大切にする。

2 互いのよさを認め合い、相手を尊重できる子どもの育成

(1) 道徳教育の充実を図る。

教育活動全体を通じて道徳性を養う。特に生命を大切にする心、思いやりの心、規範意識の醸成を図り、自分たちの生活場面を話し合い、実践する力を育てる。

(2) 人権尊重の理念を重視する。

多様な個性を認め合い、相手を尊重し、共に学び共に育つインクルーシブ教育を推進する。教職員も児童も正しい言葉遣いを心がけ、教師も児童同士も名前を呼ぶときには「さん」の敬称を付けて呼ぶことを徹底する。

(3) いじめ防止教育を推進する。

いじめ防止教育年間計画を基に年間を通していじめ防止教育を推進する。特に年3回の「ふれあい月間」には学校生活アンケートを実施し、気になる子には面談を実施する。いじめは早期発見に努め、組織で対応し早期解決を図る。

(4) 交流活動を大切にする。

異年齢集団による交流や通常の学級と特別支援学級との交流、幼保小の交流、中学生との交流、地域の方々とのふれ合い等の活動を通して、互いに認め合い学び合う態度を育て、温かい人間関係を深める。

(5) 「そしがやしぐさ」の取組を推進する。

「にこにこしぐさ」「どうぞどうぞしぐさ」「ピカピカしぐさ」の行動を推奨し、思いやりの心やボランティア精神を育てる。

3 自分の健康や体力に关心をもち、すすんで運動に取り組む子どもの育成

(1) 体力向上の取組を行う。

体力向上を目指し、体力向上旬間を設定したり、体力向上カードを用いたりして短なわ、マラソン、鉄棒、一輪車、竹馬に積極的に取り組む。

(2) 体育施設を有効活用する。

日常的に運動に親しめる環境を整備する。豊富な固定施設、広い校庭、体育館や屋上といったスペースを有効活用する。また、体育用具の充実や魅力的な運動の場づくりを通して児童の運動欲求を充足させる。

(3) 健康教育を推進する。

養護教諭、栄養士が中心となり、保健教育と食育の充実を図る。学校保健委員会を実施し、児童の健康について保護者とも連携を図る。家庭科の調理では喫食まで

行う。

III 改善結果

1 課題意識をもって考え、自分の考えを表現できる子どもの育成

(1) キャリア・未来デザイン教育を推進する。

学期の終始や大きな行事の前後など、「キャリア・パスポート」を全児童が作成する風土が根付き、自己を振り返ったり、新たな目標を設定したりすることが日常化した。児童の記入の時間も短くなっている。

(2) 課題を追究、解決する探究の過程を大切にする。

授業改善の一環として全教員が校内研究で、児童が学習課題に取り組む手立ての工夫をテーマに研修を行った。自分の考えをまとめやすくなるよう前時までの学習を掲示したり、「振り返り名人」を目標に学習の振り返りを生かした学習に取り組ませたりした。さらに、ハンドサインで意見の表出をしやすくし、ロイロノートを活用することで互いの意見交流が頻繁になって考えを深められるようになった。

(3) 教育DXを推進する。

タブレット端末を活用した授業がどの学級でも日常化し、デジタル教材での課題解決学習や探究活動、ロイロノート等での考え方の交流、キュビナでの学習の深化、家庭学習での活用を推進された。また、「活用、自律・行動規範」となるデジタル・シティズンシップを身に付いた児童が増えた。

(4) 学校図書館と連携を図る。

学習に活用できる図書資料がタイムリーに図書館司書やPTAから提示され、インターネット上の資料と文献資料とを横断しながら、各教科・総合的な学習の時間などで充実した学習に取り組めた。

(5) 教員の各教科等の専門性を高める。

担任以外の教員から学べることで、いろいろな学び方や教員と触れ合う機会を持つことができ、学習の内容もさることながら、学習の形態を学んだといえる。専門性の高い各教員からの授業に真剣に取り組み、様々な教員と繋がり、子どもたちの教育環境としての「教員」という存在を最大限生かしたカリキュラムとなった。

(6) 本物に触れる授業を取り入れる。

ゲストティーチャーから刺激を受け、実の場で体験をし、子どもたちは充実した実感を伴う学習や活動に取り組めた。興味関心の相乗効果が生まれ、「より本物を感じたい」と感想をもった子どももいた。学校、教室、地域から飛び出し、外の世界や未来を想像するようになったといえる。

2 互いのよさを認め合い、相手を尊重できる子どもの育成

教育活動全体を通じて、道徳性を養おうとした結果、自分たちの生活場面で同じようなことが起きたときに、授業でのことを思い起こせるようになってきた。

インクルーシブ教育については、推進中であり、多様性を認められる児童が増えている一方で、互いの人権を尊重し合うことにおいてバランスのとれない児童がいる。今後も、教職員がお手本となり、また学校全体の雰囲気や周囲の児童の意識の

醸成を図りながら、人権尊重の意識を底上げしていきたい。

いじめは早期発見に努め、組織で対応し早期解決を図っている。異年齢集団等の様々な交流活動を通して、互いに認め合い学び合う態度が育っている。今後も「そしがやしぐさ」を合い言葉に、温かい人間関係、思いやりの心やボランティア精神が育つよう教育活動に取り組んでいきたい。

3 自分の健康や体力に关心をもち、すすんで運動に取り組む子どもの育成

体力向上や運動技能の向上に关心の高い児童が増えている。日常的に外遊びをする運動好きな児童が多い。児童の健康について、心身ともに保護者と連携を図ることができている。